

稲荷様のお使い狐が、大火事を防いだ伝説

昔まだ、鯨井の里に、今ほど稲荷信仰が定着しない頃の話でした。

其の頃の民家と云うと、丸木の柱に、丸木の梁をつなぎ合わせ竹と茅で屋根を葺き、床は、千草・稲藁をしいた粗末なものでした。そして冬になると家の廻りに北風から寒さを除ける、藁ボッチがぐるりと囲むようにかけてありました。

冬、空気が乾燥し、其の上に冬枯れ時のため、強い北風の日に火事になると、それこそ一瞬のうちに燃え広がり、部落中が火の海なる事も度々ありました。そして、その頃の消火の手段という、手桶で井戸から水を汲んでかけるか、堀の水をかけるか位で手のほどこしようのない時代でした。そのため、この頃の防火のやり方といえば、部落の人たちが助け合い、いましめ合ってまず火を出さないこと、次には、どうかして火事が出た場合、部落中の人々が早く気がついて一刻も早く集まり、村中総出で火事の広がりを防ぎ、少しでも大事な家財道具を出すことでした。

また、その頃はいくら自分達で気をつけて火事を出さないようにしていても、人為的に発生する大火事に見舞われる事が度々あり、そのために、村の団結心は非常に強いものがありました。領土奪い合いの巻き込まれるのはいつも、生活の基本になる百姓の生産する米麦で、日本三大野戦で有名な、川越夜戦以前の戦国時代の頃も、小田原北条氏、越中上杉氏、甲州武田氏の進攻の接点となった川越地方は、先ず城周辺の戦力の低下をねらった焼き払いの対象に鯨井の部落も度々されたのです。

鯨井史の中に、貴重な御嶽神社のお姿の立像がありますが、此の立像は、その頃以前から御嶽神社の御神体として、鯨井地内に神社が建立されて祀られていたのですが、立像と共に保管されている伝承板には、甲州武田軍の度々の焼き払いにあい其の都度御神体は運び出され今日迄保管されたと記されています。私がどうして当時の背景をこまかに説明しているかと申しますと当時の部落の生計、社会生活を維持していくためには、不時の災害はもとより、戦乱による世情不安定のなかで、誰が部落を守るかと致しますと、全く自分達で守って行くより仕方のない時代でした。其のためには、部落の人の中から頼れるすぐれた人を、長、又は頭とし、其の下に一致団結して、すべて自分達にふりかかる幾多の災害にそなえて生活していたのです。

其のために、部落の、長、又は、頭となる人は、実に責任が重く、農耕神事を中心とした、農業生産の指導者として、又、時おり襲うなにより恐ろしい領土奪い合いの渦中に巻き込まれたときの総指揮者として、台風、水害、地震等、天災時の処置、後始末、特に部落の火災時の采配、予防に至っては恐らく、冬ともなれば、夜は枕元に常時小刀、火事場布子を置いて、寝ていても誰よりも先に、飛び出せる用意をし、特に冬枯れの北風の夜などは、まんじりともしないで目をあけて体を横にしていたのではない

かと思われます。其の証として、何回も戦災のために、焼き払われた神社から御神体が、戦渦をまぬがれたという事実が、如実に物語ってます。

次に語ります伝説は、時代の背景を私と共によく頭にいがえた上で御一読下されば、よくおわかりのことと思います。

昔の或る夜の事でした。其の晩は二月初めの関東の空っ風がゴーゴーと、うなりを上げ、樫の大木をゆすって吠えたてていました。村人は、体を寄せ合い、無事を祈って床につきました。五十歳を過ぎたばかりの村の長は例の如く、枕元に小刀と、火事場布子を揃え、まんじりともしないで横になっていたのです。「去年はどうやら一、米はとれたし、さいわい、部落にやとおきな災いもなかったし、だが一今晚あたり火事で起こらねばいいんだが一、心配だな一」と、思っていると北風は一層勢いを増し樫と樫の大木は怒号し、藁屋はきしみ声を上げました。と、そのときです。一せいに吠えたてる異様な、ケモノの音がきこえるではありませんか。しかし長の心配している火事

特有の竹のはじける音はしませんでした。しかし責任感の強い長「村長」は「はて一、変だぞ起きてみるか」と決心した長は、もう火事場布子を着、小刀をたばさんで、裏の街道にかけだして見ました、そのときです。長の目の前を真白い、やや細い体をした犬が狂気の如く吠え立てて駆け抜けていきました。そして、長の目に入った光景は街道南の一番東の民家の藁ボッチが北風にあおられながら、激しく燃え広がる、それこそ普通の人では、腰の抜けそうな地獄絵でした。

「火事だ一、みんな起きろ一、火事だ一」

しかし、腹の据った長は、犬と一緒に、声を限りに怒鳴りながら激しく一戸、一戸、戸をたたいてかけあるいたのです。藁ボッチの火事は、竹のはじける音がしないので、ぐっすり寝込んだ村人にはわからず、その内に今度は、火は主家に燃え移り大きなドカン、ドカーンという、藁屋根民家特有の火事の音が部落中の人達に知れ、それとばかり、外に飛び出しました。しかし、その時はもう大変な騒ぎになっていて、村の長にたたき起こされた人達は、いち早く火事場に駆けつけ、其の人達によって燃えている家の家財道具の大半は、外に運び出されていたのです。

此の日の火事は、幸いにして、火元のの民家が街道南にあり、又、他の家と離れていて、風下に家がなかったために大火事にならず村中の人はほっと一息つきました。

「長さ一、早かったな一助かったでや、礼のいいようもねえ」

「長さ一、何で、こんなに早く気がつきなされたでや一」

火元の家の方はもちろん、村人は口々に長に礼を云いました、長は一寸考えたあと、一安心した村の衆に「実あ一、いつものことなんだが、こんな大風の晩は寝つかれねんでいたんだが一、すると、外の戸を、ドンドンたくもんがあるんで、おどろいて仕度さ一して出て見ると、真白い、尾っぽのふさふさした四ツ足が、俺の布子くわいて街道のほうにずっと行くんで行って見ると此の始末よ、あれほど村中して用心してたのに此の寒さで一、通行人か、何か一焚き火でもしたんじゃないか一、それにしても助かつ

たでや一、一軒ですんでよかったな一」

それを聞いた村の衆は、いっせいに立ち上がり口々に言った。

「長さ一、そりゃあ、お稲荷狐じゃねいか、きっとそうだ」

村の長は、誰も俺の外に、藁ボッチの火事の始まりのために、犬と駆けずり回ったことを知らないことをよい事にし、ほんとうに、お狐様のお助けだと村人に話し、今まであった小さな社を改築し、其の近くに火の番小屋を設けることを村人に提案しました。その後、鯨井の稲荷信仰は益々厚くなったのです。

稲荷様のお使い狐が、大火事を防いだ伝説

以上鯨井史より抜粋 昭和58年3月31日 発行